



Data

監督: 吉田喜重
出演: 三國連太郎/松村康世/三宅康夫/倉野章子/菅野忠彦/飯沼慧/内藤武敏/今福正雄/辻萬長/八木昌子

■■■ショートコメント■■■

◆シネ・ヌーヴォで開催されている「ATG大全集」で、『エロス+虐殺』(70年)に続いて吉田喜重監督の本作を鑑賞。1936(昭和11)年の「二・二六事件」は、私にとって大いに興味のある題材だが、その時の皇道派青年将校たちの理論的指導者であった北一輝とはどんな人物?また、彼が唱えた「日本改造法案大綱」とはどんな内容?

内田吐夢監督の『飢餓海峡』(65年)で観たものすごい演技が私の目に焼き付いている個性派で、演技派俳優の三國連太郎が北一輝を演じていることもあり、公開時に鑑賞できなかった私にとって本作は必見!ところが、『エロス+虐殺』の時は満席だったのに、なぜか本作の入りは少ない。これは一体なぜ?

◆『朴烈(パクヨル) 植民地からのアナキスト』(17年)でも、『菊とギロチン』(18年)でも、暗殺シーンは多いものの、成功する事例が少ないが目立っていた。ところが、本作冒頭では、安田財閥の当主、善次郎を朝日平吾(辻萬長)が短刀で見事に暗殺するシーンが登場する。これは昭和10年(1935年)の夏の終わりのことだが、暗殺後自決した平吾の遺書と血染めの衣を持って、その姉(八木昌子)が北一輝の屋敷に赴くところから本作のストーリーが始まっていく。北一輝と同じ立場で活動している西田税(菅野忠彦)が読む平吾の遺書には、北の「日本改造法案大綱」の影響がありありと・・・。

『戦争と人間』三部作(70年・71年・73年)、『シネマ5』173頁)では、滝沢修扮する五代財閥の当主、五代由介のいかにも当主らしい泰然とした姿に対して、芦田伸介が演じた暴れん坊(?)の弟、五代蕃介の壮士然たる姿が印象的だったが、本作でも羽織袴姿で杖を持って歩く北一輝のいかにも壮士然とした姿が、三國の見事な演技力もあって良く似合っている。ところが、平吾の衣を持って三井財閥の下へ単身で乗り込み、一連の講釈を終えると、それを「ごもつとも」という表情で聞いていた財閥側は、北に対して「おみやげ」を。すると、その包みを「領収書代わりに・・・」と返還した北一輝の手元には、かなりの額の現金が渡っていたから、アレ・・・これって、当時の北は体の良い総会屋

のようなものだったの・・・？

◆北一輝は思想家、革命家として有名だし、何よりも『日本改造法案大綱』の著者として有名だが、同時に日蓮宗の熱狂的な信者としても有名。そのため、本作スクリーン上には、熱心に法華経を唱える姿が登場するが、本作ではそんな宗教的な素養と「日本改造法案大綱」の思想的 content についての説明が少ないのが残念。その代わり(?)として、本作では当時の下層軍人の典型と考えられる1人の兵士(三宅康夫)と、その妻(倉野章子)を登場させて、北と絡ませることによって、北の思想や、「五・一五事件」「二・二六事件」における北の立場をあぶり出そうとしている。当時、陸軍の皇道派青年将校たちの理論的支柱とされた「国家改造計画法案」をもとに、国家改造計画＝クーデター計画が着々と進められていたが、それに積極的に協力する西田に対して、北の立場は？

吉田監督が描く本作でのそこらの本筋の展開は少し難解だから、吉田美学はタツプリ堪能できるものの、そのストーリー展開はイマイチ・・・？

◆北から五・一五事件の情報をもらい、上官から「変電所を爆破せよ」との具体的任務を与えられながら、それを執行できず、妻と共に北の屋敷に逃げ込む兵士の姿を覗いていると、何とも痛ましい。口では天皇陛下のために殉国、捨身奉公を唱え、兵士として具体的に執行すべき任務も与えられながら、「できませんでした」と言って戻ってくるのは如何なもの・・・？

二・二六事件における青年将校の姿は高倉健と吉永小百合が共演した森谷司郎監督の『動乱』(80年)等で鮮明にされているが、本作後半に描かれる二・二六事件の姿は断片的にすぎるからその全体像はつかみづらい。それは、本作のテーマを五・一五事件から二・二六事件に向かう当時の日本の情勢下における北一輝の内心に当てたためだが、その成否は・・・？

屋敷の中にいながら、「二・二六事件」の“実況中継”を聞いていた北は、決起軍から「占拠を解く」と連絡を受けると、「それは絶対だめだ」と伝えるとともに、「司令官は真崎大将でいい」という本心を伝えたが、そこまで具体的に関与してくると、二・二六事件における北の立場は・・・？

◆本作ラストには、決起した青年将校たちが既に処刑されたことを聞いた直後の北自身の銃殺シーンが登場するが、それがいかにもあっけないのが残念。つまり、これだけあっけなく処刑されてしまったのでは、①青年将校たちは、なぜ昭和維新を叫んで二・二六事件に立ち上がり、重臣たちを暗殺したのか？②二・二六事件で北がいかなる理論的バックボーンになったのか？等が全然解明されないわけだ。もし、これが裁判闘争になっていけば、かなりの程度に二・二六事件の本質が明らかされたはずだが、当時はそれは不可能だったのは実に残念だ。

今年7月には麻原彰晃はじめ、死刑判決が確定していたオウム真理教の旧幹部たちの死刑が2度に渡って執行されたが、その後それでも真相究明が不十分だったことがさかんに

指摘されている。それに比べても、裁判によって二・二六事件の真相と北の思想がそれにか
いかなる影響を与えたのか等について、少しでも解明されていれば・・・？

2018（平成30）年7月31日記